

## 要 約

昭和59年 10

- (1) ヒメジャコの生殖巣部重量調査は5月から10月まで実施した。生殖巣部重量比率(GWR)の平均値は5月に23.2%、6月には19.2%と更に上昇し、7月は27.7%、8月は30.4%、9月には30.8%であり、10月には12.5%と大きく減少した。
- (2) ヒメジャコの成長量調査は定点のハマサンゴの死んだ部分に生息している個体の穿穴長径値を継続測定した。測定は5個体で、1978年(昭和53年)に $1.22 \pm 0.12$  cm (1.05~1.40 cm)であった個体は10年後には $10.06 \pm 0.31$  cm (9.60~10.40 cm)となった。1987年(昭和62年)から1988年(昭和63年)の年間平均成長量は0.19 cmであった。
- (3) ヒメジャコの放流効果調査は1985年(昭和60年)に放流した貝の3年後の生残個体を継続調査した。埋め込み法の生残率は17.1%であり、折衷法は5.5%であった。1980~1981年(昭和55年~昭和56年)に放流した個体の継続調査では生残率の変動は少なかったが、年間成長量は更に鈍化した。
- (4) シャコガイの種苗生産に関する試験は、ヒメジャコについては7月20日、25日、8月16日の3回採卵を行い(生殖巣懸濁法)、受精後13日間に平均殻長 $248 \mu\text{m}$ で推定125万個体が生残し、63日目には1mmサイズの種苗を推定45万個体生産した。今年度の種苗生産数は約 $51 \times 10^4$ 個体である。ヒレジャコとシャゴウについては生殖巣の発達が充分でなく、種苗生産を行えなかった。
- (5) 1988年6月2日、30日、7月28日、及び8月26日にヒメジャコの新規加入量について調査したが、目視可能な稚貝の加入は認められなかった。
- (6) 1988年8月26日粒度組成と塩酸処理後の残留率調査を5地点で行った。結果は例年とほぼ同傾向であった。
- (7) 水質等環境調査は下記の項目について実施した。  
水温、比重、天気率、風向、栄養塩類等の水質及び透明度  
比重の年平均は25.28で、昨年は25.90であった。他の項目は例年に比較してそれほど大きな差異はなかった。